

「宗教」の未来には大きな希望をもてないと感じている人も、「宗教的なもの」や「アニミズム」にはいくばくかの希望を託すかもしれない。逆にそうしたアニミズム言説の背後にある宗教離れの現実こそ問題だと考える人もいる。「気」をめぐる東アジアの宗教思想の伝統にエコロジ的な世界観の可能性を求めようとする人もいれば、「気」の流行に無気味なものを感じる人もいよう。

しかし、このように「宗教ではない宗教的なもの」に希望を託す人々が増大している事実、日本や東アジアだけに見られるのではない。広く世界の先進国では、「宗教」にかわる「霊性」を求める潮流が台頭している。健康とは何かを定義しようと思えば、からだや心だけでなく、「霊性」的な次元をも考慮に入れなければならないと考えられるようになった。医療の専門家もそのことを認めざるをえない現状である。現代宗教について深く考えようとする、このような広い意味での宗教をも視野に収めていかなければならない。そのようにして、「宗教」とは何かをも改めて考え直していかなければならない時代に、私たちは居合わせている。

ここまで述べてきたのは、本誌『現代宗教』が二一世紀の幕開けに際して、問いかけようとしている問いのほんの一部である。私たちは日本の宗教の現実から目を離さないようにしたい。日本人の宗教生活のあり方に即して、現代社会を悩

ませているさまざまな問いに向き合いたいと思う。哲学や思想や理論だけでなく、政治、経済、教育、科学技術、芸術等、人類の営みの多くの領域の中の宗教的なものに目を向けることで、何が見えてくるか問おうとする。

それと同時に、本誌は広く世界の宗教にも目を配ってきたい。世界の諸地域の関係がますます密になっていることは、私たちの日々の実感である。今やムスリム（イスラム教徒）の現実、ユダヤ教徒（ユダヤ人）の現実、ヒンドゥー教徒（インド人）の現実に関心することは難しい。現代とはまた、白人の富裕層がシャーマニズムの実践に熱心に取り組む時代でもある。そして、ユング派を初めとする心理療法が宗教運動のように、人々の癒しや救いの欲求を汲み上げる時代でもある。これらも私たちの関心を大いにそそる話題である。

『現代宗教』は年に一回の刊行物として出発する。取り組みたい論題、提供したい情報はまことに多い。しかし、足取りは着実なものでありたい。日本の市民の間に、とりわけ宗教に関わりが深い、また宗教に種々の関心をもつ読者の間に、宗教についての適切な情報を提供すること、そしてさらに宗教についてよりよく理解し、考える姿勢が育つための手がかりを提供すること——この目標を見失うことなく、一步一步、ゆっくり歩んでいこう。

対談

死者の声を

聴くこと

— 慰霊と追悼をめぐって

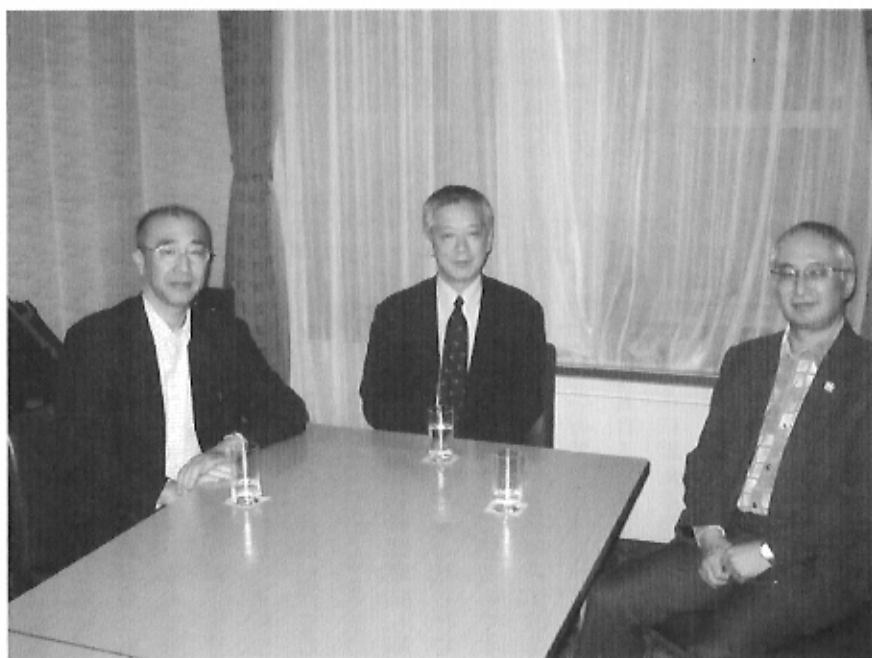
末木文美士

すえき ふみひこ

〈司会〉島蘭 進

池上良正

いけがみ よしまさ



司会 日本の宗教史における慰霊と追悼の問題というこ

とで、この問題を最もよく理解しておられる日本の宗教研究者の二人においでいただきました。現在のアクチュアルな問題を視野に入れながら、日本文化における慰霊と追悼を考えるという趣旨で対談の場を設けさせていただいたのですが、そもそも「慰霊と追悼」というコンセプトで日本文化を見るのが適切かどうかという問題もあるようです。本日はこの辺から口火を切っていただけたらと思います。

■ 仏教研究から隠されたもの

末木 そうですね、まず私自身の問題意識をお話いたします。私はいわゆる宗教学と少し異なるところから出發してまして、もともと仏教史をやってきたのです。その中で何故死者の問題に関わるようになってきたかを簡単に話しておきます。

それには二つの文脈があります。ひとつには、日本近代の仏教もしくは仏教研究を考えていくと、そこには忘れられている問題、あるいは意図的に隠蔽されている問

から問題にされていないのか。そう考えていったときに、発想の転換が必要になると思うのです。

死後にどうなるかということは、わかることではないし、哲学的議論の場に乗せることはできないかもしれない。しかし、死者と我々が関わりを持って生きていくということは、事実なわけです。それが事実である以上、その事実は哲学的に扱われなくてはならないのです。例えばハイデガーなどでも、人間が死すべきものであり、そこから死への先駆的決意を言うわけですが、しかし自らの死というレベルでしか考えられていない。最近になって気がついたのですが、唯一死者との関わりを言っていた哲学者は田辺元だった。田辺は晩年ハイデガーを批判して、それは結局生の哲学でしかないと言っています。田辺自身は死者との実存共同ということで、死者と共に関わり進んでいくという哲学を主張しているのです。こういうことを言っている日本の哲学者がいたということに、私は驚きました。自らの死というのは重要な問題ですが、それを考えるためには、まず死者とどのように関わらねばならないのかという問題が大きくなってきます。

題がある。その非常に大きなもののひとつが、葬式仏教という問題です。実際、近代の日本仏教は葬式仏教に基盤を置きながらも、上部の言説の世界ではそれが全く触れられず隠されていた。仏教とは死者のためのものではなく、生ける者のためのものであって、いかによく生きるかを追求するものだと言われていた。しかし、それはちよつとおかしい。やはり根っこを隠して表面だけを見ているのではないか。その根っこをよく見直してみようということ。これは同時に、神仏関係の問題にも関連しています。仏教が純粹に単独で存在すると見られて、それまでの日本の神との関係が全く隠されているのです。そういう側面を一度視野に入れてみないと日本の仏教は理解できないのではないかと思います。

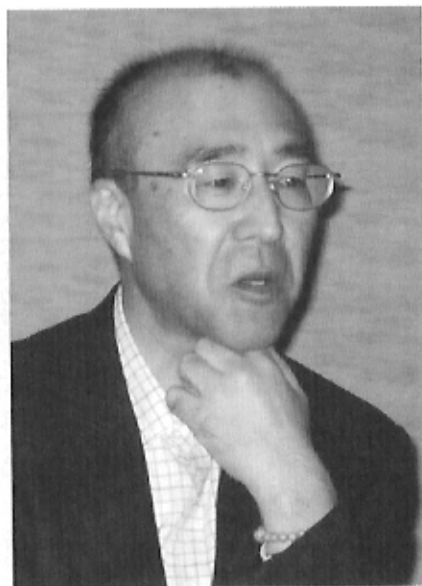
もうひとつは、今日の哲学における営みを見ても、そこには忘れられた問題があるように思えるのです。死については確かにずいぶん議論されています。しかし、そのときに議論されている死は、「自らが死すべき存在である」とか「死にゆく者にいかに関わるか」といった問題です。しかしそれはまだ生の哲学であって、死が正面

こういう点から、私は死者の問題を考えるようになってきたのです。死者及び慰霊と追悼の問題を歴史的に追及してきたというわけではなく、これから日本の宗教史に即して捉えなおしてみたいと考えている段階です。

■ 「慰霊と追悼」の近代性

池上 末木さんが今おっしゃったことは、私の問題関心からも共感をもって考えていける問題だと思います。そこで本日のテーマにある「慰霊と追悼」ですが、なぜこの言葉が選ばれたかを考えると、そこには第二次大戦後の社会状況やメディアの影響があるように思います。おそらくは靖国問題も同様ののですが、いわゆる非業の死を遂げた人、心ならずも命を落とした人をメディアが扱うときに、どうしても「慰霊」と「追悼」という言葉が頻繁に使われます。それはなぜかと言えば、戦後の政教分離政策の中で、宗教的な臭いの少ない、都合のよい言葉として使われてきた、という面が強いと思われます。

これはよく言われることですが、死者との双方向的な関わり——生きている人と死んでいる人とが互いに関わ



池上良正氏

りあうこと——は、日本文化の中では比較的温存されてきました。それを表現する言葉も、「祀り」「鎮魂」「慰霊」「哀悼」「供養」「弔い」「浄霊」など、非常に多様です。英語に直すとmourningとmemorialに集約されてしまうような内容が、バラエティーに富んだ言葉として表現される。ところが宗教史を見ていくと、「慰霊」「追悼」という言葉は、前近代にはあまり使われていない。「慰霊」はほぼ近代に入ってからで、おそらく日清・日露戦争以降です。さかんに使われるようになった

とは言えず、それらが介入する余地も残されている。

このような言葉の混乱の中で、「慰霊」「追悼」という言葉で日本人の死者との関わりを考えていくとすると、前近代の分析概念としては使いにくい面がある。前近代では、むしろ「祀り」や「供養」などの言葉が、ひとつの文脈の中で意味を持っていました。しかし、近代以降はそこにも複雑な意味が積み込まれてしまっただけで、容易に解きほぐし難くなっていると思うのです。

■「他者」としての死者

末木 慰霊や追悼というのが戦後の政教分離の中で広く使われるようになったというのは、重要な指摘だと思います。日清日露戦争の頃から、いわば死者が国家に収奪されることの中で出てきた近代固有の問題でもありません。私も、「慰霊」や「追悼」という言葉に違和感を覚えるのです。あえて宗教的なニュアンスを除こうとしたときに、実は死者との関わりの方に非常に重要な部分を切り捨ててしまうことになっているのではないかと。

和辻哲郎の『人間の学としての倫理学』が非常に面白

のは、むしろ戦後の状況において、メディアの上や公共の式典などで、「供養」「祭祀」「浄霊」などと言ってしまうと特定の宗教の臭いがかかってしまうことから、この二つの言葉が好まれるようになりました。

ここでも「追悼」はともかく、「慰霊」は「霊」という言葉が入っていて宗教的じゃないかと言われたりもする。最近の小泉首相も、「哀悼の誠」などという、実に微妙な言い方をしています。「追悼」や「慰霊」が集団的性格を持ちやすいのに対して、「哀悼」というと、もう少し個人的・私的なニュアンスが出てくる。このように言葉の多様さは興味深いのですが、逆に言えば、思い通りに勝手に使われてしまうという側面もあります。研究者の本を読んでも、みなそれぞれ自分の想いを反映しているために、「慰霊」「追悼」という言葉が個人的な文脈でも集団的な文脈でも、どちらでも使えてしまう。

「私の慰霊の気持ちを表すのがなぜ悪いのか」という個人的な心情としても使える一方で、「慰霊祭」とか「追悼式典」というと強い集団性を帯び、政治性・権力性も絡まってくる。既成の宗教からも必ずしも独立している

いのですが、倫理というのは人と人との間で成り立っている。つまり人との間を規制するルールなのです。倫理だけではなく政治・経済でも、社会を動かしているのは言説化されたルールでしょう。お互いが何らかの形で了解可能なルールに基づいているのです。そうすると、ルールを外れたものは排除されていくことになるのですが、死者という問題はまさに、人と人との間の問題として捉えきれない、外れたものとなってくる。ルールで捉えきれないところで侵入してくるもの、それを他者という言い方ができるのですが、そういう意味で、死者とは他者の最も極限的な形態なのです。われわれ生きている側が語りかけたり議論したりできないもの、ルールを設定して互いの行動をセーブし合ったりできないもの——そのような他者が侵入してくる事態が死者との関わりだと思うのです。

したがって、人間の側の秩序化された世界で捉えようとする限り、どうしてもはみ出すものが出てくる。結局は、その「あいだ」を扱ってきたのが宗教なのです。ところが、その宗教を排除しようとする、極端に言えば、



末木文美士氏

肝心の死者なき「慰霊」になってしまふのです。戦争の死者に対する追悼にしても、ある意味では政治問題となつてしまい、肝心の死者が関わる問題でなくなつてしまふ。つまり、生きている人間の間の問題であり、しばしば言われるように、記憶の問題となつてしまふのです。記憶とは生きている人間の心の中に残っている限りの、心理的な死者の問題であつて、死者自身との直接の関わりではないのです。そういう意味で、メディアや法律の問題として論じられる限りにおいては、死者との関わり

は決して論じられないという矛盾した問題となります。私たちが宗教の問題を考えるときには、そういうルールの範囲を逸脱していく問題として死者を考えなくてはならない。死者は決してこちらの言うがままになつてくれる存在ではなく、突然襲いかかつてくるかもしれず、呪いをかけてくるかもしれない。そういう意味で、生きてある人の世界への闖入者であり、計算不可能な存在なのです。そのように考えると非常に大きい問題であつて、政治レベルの慰霊や追悼に収まる話ではない。そういうところから掘り起こしていかなければならないのだと思います。

■死者の安定化——祭祀と供養

池上 宗教の問題を考えたときに、死を存在論の問題や記憶の問題に限定せずに、身近な死者の存在感や関係性を取り戻していかなければならないというお話には、私も共感を覚えます。私の場合には、末木さんのような哲学・思想ではなく、出発点が現代の民俗宗教のフィールド・ワークでした。東北や沖縄の民間の宗教者やそれに

関わる人々が、どういう形で死者と付き合っているのか。それが発想の原点にありました。二年前に『死者の救済史』という本を出版しまして、自分としてはあまり専門的な分野ではないのですが、前近代の民衆宗教史の中で、日本の庶民層が身近な死者とどう付き合ってきたのかを考えてみました。そこで私の問題意識にあったのは、日本の平均的な庶民にとっての死者の存在感でした。

そこを考えると、末木さんがおっしゃるように、仏教の非常に大きな関わりがあります。かつての民俗学には、「仏教以前の日本人の固有性」を求める傾向が強く、靖国論争などにおいても、死者との親密な関わりを本来の日本人の信仰のように捉えて、外来宗教を外して見ていくという発想をとる方もいます。しかし、日本の社会に死者との深い関わりと死者の存在感を持続させてきたのは、むしろ仏教の方だと思います。仏教と総称されるものからのインパクトは非常に大きかったというのが、『死者の救済史』の大きな結論のひとつでした。

さらに、大多数の人間は、この世への未練とか執着とか恨みとか、そういう重いものを抱いて死んでいくので

すから、いわば「不安定で落ち着かない死者」のイメージが、重要なものとして片方にあります。そのような「不安定な死者」を落ち着けて、いかに「安定した死者」に変えるかということが、庶民の大きな課題だったので。その課題を育て、そして——言葉は悪いですが——振り、かつ形成してきたのが、仏教という複合体のインパクトだったのではないかと思います。

私は前近代社会における日本人と死者との関わりが、「祭祀システム」と後発の「供養システム」との二つのシステムの依存・競合というモデルで捉えられるのではないか、という見通しを示してみました。従来は「神道」と「仏教」との複合という問題意識で見られることが多かったのですが、「神道」対「仏教」と言ってしまうと、どうしてもそれぞれが完結した本質を持った実体のように固定化されてしまふ。そこでは「真の仏教や神道とは何か」とか「葬式仏教は仏教なのか」などの論争に足を取られやすくなる。そういう論争を避けて、むしろ平均的な庶民が身近な死者にどう対処してきたのかという、個別テーマに照準を合わせるためのモデルを作ってみた